

コミュニケーションを図る資質・能力の育成と指導・評価の一体化 ールーブリックの活用ー

言語文化系教育サブプログラム英語

和合 嘉子

【指導教員】 及川 賢 奥住 桂

【キーワード】 指導と評価の一体化 パフォーマンス課題 ルーブリック 評価基準 フィードバック

1. 研究理由

学習指導要領解説(2021)では、外国語学習において語彙や文法といった個別の知識の習得自体を目的とするのではなく、学習過程全体の中で、知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用し、思考・判断・表現を繰り返すことを通して、資質・能力が相互に関連しながら育成されることの重要性が、目標の改善点として示されている。このような考え方に基づけば、パフォーマンス活動は知識・技能の活用のみならず、コミュニケーションに対する態度を含めて育成する学習活動として位置付けられる。実際のコミュニケーションにおいては、相手の理解の程度を意識しつつ表現を工夫したり、相手の発話に応答しながら聞き続けたりするなど、相手への配慮を伴う相互的な関わりが求められるからである。

そこで、プレゼンテーションやスピーチ、ディベート、ALTとのやりとりのようなパフォーマンス活動が学習過程として効果的であると考えられる。このようなパフォーマンス活動においては、知識・技能の活用だけでなく、学習者が目的や相手をどのように意識し、どのように思考・判断・表現をしているのかといった学習過程を的確に捉える評価が求められる。そのためには、作成した評価規準を学習者に提示し、教師と学習者で共有することが必要である。こうした評価を可能にする方法の一つとして、評価規準を段階的に示すルーブリックの活用が挙げられる。

令和6・7年度の二年間で、所属校では埼玉県教委の委嘱を受け、英語指導力改善事業に取り組んできた。改善事業より前は、単元末のパフォーマンス課題を評価する際には、評価規準を事前に生徒に伝えることは実施してきたが、「～のような発表を意識しよう」「～の練習にたくさん取り組もう」といったように、目標とするイメージを言語化して示すに過ぎなかった。しかし、改善事業でルーブリックに関心を持ち学び進める中で、ルーブリックを使い評価基準を生徒に示すことで、生徒の「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」の育成に効果があるのではないかと考えた。そこで、令和6年度に担当した学年の生徒に単元のはじめに、パフォーマンス課題の評価基準をルーブリックで示した。パフォーマンス課題を行った後、生徒の自己評価で「伝える相手は誰か、どのような聞き手かを考えて準備することができた」「ルーブリックで、自分の発表のどのような点が良い、または改善する必要があるのかが分かりやす

かった」といった記述が多く見られた。このことから、ルーブリックの活用は、生徒の「コミュニケーションにおける資質・能力」を育成するために効果があると感じた。しかし、松崎(2016)は、英語教育分野におけるルーブリック活用の実践的研究が不十分であるとし、藤居(2020)も、ルーブリック評価の開発と活用に関わる客観的資料が十分でない指摘している。そこで本研究では、ルーブリックを活用することで、生徒達にどのように影響を与えるかについて研究し、ルーブリック活用の実践的研究の一つとしたい。

2. 先行研究と本研究の問い

白畑他(2019)によれば、ルーブリックとは「量的な評価が困難な学習パフォーマンスを評価する際に用いる表。縦軸に「学習指標(criteria)」、横軸に学習者の到達度を評価するための「評価基準(levels of performance)」を置く。両者が交わる欄には「記述子」(descriptors:対象者のパフォーマンスの特徴を記述した文/文章)を書く、この表を用いた評価をルーブリック評価と呼ぶ」とある。さらに、「ルーブリックによる形成的評価(formative evaluation)を受けた学習者は、次の学習上の課題が明確に把握できるようになるため、ルーブリックが形成的評価において果たす役割は大きいと考えられる(Brookhart, 2013), (Stevens & Levi, 2012)」とも示されている。

パフォーマンス評価を適切に行うためには、評価規準を事前に作成し、生徒に提示することが有効である。生徒は提示された評価規準を基に、自身の目標を明確にし、意欲的に課題に取り組むことができる(菅, 2020)。田中(2019)でも、評価規準やルーブリックでのレベル差を児童生徒が事前に知ること、深い学びに向かう主体性につながるとある。鈴木(2011)は、ルーブリックを学習者に提示することの効果を検証し、テストのフィードバック時にルーブリックを提示されたグループは、提示されなかったグループと比較して、内発的動機づけや学習行動において肯定的な影響が認められたと報告している。ハッティ(2019)によると、学力に大きく影響する一つの要因は、フィードバックである。意味のある適切なフィードバックには、学習の目標と到達基準とそれに到達する方法、そして学習者の到達状況を把握し、目標との差を埋めるために何をすべきかを教師が理解する必要がある。不完全なフィードバックを学習者に与えることになれば、何度も練習する必要が生じたり、意図しない方

向に進んでしまったりすることにつながる。だからこそ、向かう地点としての目標、目標への向かい方、現在の地点と次に目指す地点はどこかを示した評価基準を教師と学習者が共有して認識しておく必要がある(ハッティ、2019)。このように評価基準となるルーブリックを生徒と共有することは、生徒にとって課題となる目標が明確になると共に、より高い評価を得るための段階的な学習プロセスを可視化することにもつながると推察される。学習プロセスが明確になれば、目標達成のために学習意欲が高まると考えられ、生徒のコミュニケーションにおける資質・能力を育成することにつながるのではないかと考えた。

さらに、評価基準を学習者と協同で作成することの意義についても指摘されている。スティーブンス他(2014)は、ルーブリックを含む評価の枠組みを学習者と共有・協同的に構築することが、学習者自身が学習過程の「主人公」であるという自覚を高めることにつながると述べている。また、評価に主体的に関わることで、学習者は与えられた課題により真剣に取り組み、学習に専念する姿勢や創造性を高めることが可能であるとされている(Bound、1990)、(Lewis, Berghoff & Pheeny、1999)。

そこで、以下の問いについて検証を行う。

問1. ルーブリックを生徒に提示すると、評価基準に基づく個々の生徒の目標が明確化されることが示されているが、それにより、コミュニケーションにおける資質・能力に変化はあるか。

問2. ルーブリックの評価基準の一部を生徒と協同で作成することで、生徒の「学びに向かう力・人間性等」に変化はあるか。

3. 検証方法

検証の流れは以下の通りである。

- ①ルーブリックを活用した検証授業
- ②事後アンケート(選択・自由記述)の実施
- ③インタビュー(一部生徒)による聞き取り調査の実施
- ④因子分析、MAXQDAを使用した分析

対象: 所属校中学3年生、4クラス(計120名)

教科書: 東京書籍 New Horizon English Course 3

単元: Unit 6 “What does it mean to be a global citizen?”

単元目標を「1人の地球市民として「世界がこうであつたらいいのに」と同年代の人やクラスメイト、先生達と語り合うために、そう考える理由を含めて「どのようなことが大事で、自分は何ができるか」を相手の共感を得られるように伝えることができる」と設定し、単元末に一人一人の生徒がプレゼンテーション発表をして評価することとした。その際に、評価者と検証者を分けることで、より客観的な検証結果が得られると仮定し、筆者はT2として授業に参加し、該当学年の英語科教員と連携して、検証を行った。

Unit 6を合計10時間として計画した。以下は、10時間の学習計画である(表1)。

表1 Unit 6 学習計画表

1 時間目	単元目標を提示する。 ALTの発表を見る。思考ツールの一つであるマンダラートを活用しながら、生徒が個々に発表テーマ、内容についての考えを広げる。
2 時間目	<u>ルーブリックを生徒と共有する。</u> JTEによるA、B、Cのレベル別モデル動画を見る。 Sのレベルがどのようなものかを考え、全体で共有し、教師、生徒共にSの評価基準を考える。 学習計画表(以下プランシート)を配布し、授業計画を生徒と共有する。 事前アンケートの実施。
3 時間目	教科書の内容理解。本文音読。
4 時間目	現時点での自分の考えを発表し、個々に動画撮影、提出。
5 時間目	発表に向けての準備。
6 時間目	発表に向けての準備。
7 時間目	発表に向けての準備。
8 時間目	<u>ルーブリックの再提示。</u> 3人グループで中間発表を行う。 個々に動画を撮影し、提出。 <u>ルーブリックを使って、相互評価を行う。</u> 良かった点、課題点をコメントシートに打ち込み、グループで共有する。
9 時間目	発表に向けての準備。
10 時間目	6人グループで発表。 <u>ルーブリックを使って、自己評価及び相互評価を行う。</u>
後日	事後アンケートの実施。 JTEとALTで発表時の動画をもとに、 <u>ルーブリックを使って、(記録に残す)評価を行う。</u>

以下は生徒に示したルーブリックである(表2)。Sの評価基準をはじめは空欄で提示し、生徒にどのようなものがSのレベルになるかを個人で考える時間をとった後、所属校で使用しているICT学習支援ソフトのミライシードを使ってクラスで共有し、後に授業者が生徒に多く使用されている語を使い、文章化した。8時間目で行う中間発表の前に生徒にSが記載されたルーブリックの再提示を行った。

Sの評価基準考察時、生徒から出た意見を以下に示す。

- ・原稿は見ずに聞き手の目を見る、ジェスチャーを入れる
- ・聞き手の反応を見て、時には聞き手とコミュニケーションをとって関心を引く
- ・習った文法や単語を使うと理解されやすい
- ・Unit 6で新しく習った文法や単語を使う
- ・発音が良くないと伝わらない
- ・聞き手を意識して話す順序、スライドの構成を考える
- ・聞き手の共感を得られるような内容

・社会問題の核心をつく内容、解決のための案がある

表2 ルーブリック評価基準

	正確さ	伝え方	内容
S	SVがあり、時制や文法に誤りのない英文で、中学校で習った単語や文法を用いて、正しい発音で話すことができる。	原稿を見ずに、見やすいスライドを活用してジェスチャーや流暢な発表で、聞き手を意識して話すことができる。	自分の考え、その理由、具体例や体験、感じたこと、また現状や何が大切か、自分たちに何ができるかを相手にわかりやすく、文章構成を意識して伝えることができる。
A	SVがあり、時制に誤りのない英文で話しをすることができる。	原稿を見ながら、聞き手を見ることができ。	自分の考え、その理由、具体例や体験、感じたことを伝えることができる。
B	SVのある文で話することができる。	原稿を読むことができる。	自分の考え、その理由、具体例を伝えることができる。
C	単語や短いフレーズで話することができる。	先生のサポートがあれば、原稿を読むことができる。	先生のサポートがあれば、教科書に書いてあることや調べたことを伝えることができる。

4. 検証結果と考察

事後アンケートは、A, B, Cの3つのパートから成る。Aパートでは、発表に向けてのルーブリックの活用度を問い、Bパートでは、実際に力がついたと生徒が感じた英語力について問い、Cパートでは、発表改善のために役立ったと感じたものとルーブリックの活用についての具体的な問いである。集計にはGoogle フォームを使用した。質問及び回答をグラフで示す。各グラフは、5件法を用いた(1=そう思わない。5=そう思う)。

全体的な傾向として、4または5で回答している生徒が多数である。このことから、生徒の多くは、ルーブリックに対して肯定的に捉えており、ルーブリックが単元のはじめに提示されたことで、本番の発表に向けての準備時にルーブリックの評価基準を意識したと推察する。以下に、各パートの回答を考察する。

Aパート：発表に向けてのルーブリック活用度への問い

A-1:ルーブリック・プランシートがあることで、「計画的に発表準備をすすめられましたか。(図1)

A-2:ルーブリックがあることで、「正確な英語で話ができる」ように意識しましたか。(図2)

A-3:ルーブリックがあることで「聞き手を意識して発表すること」ができましたか。(図3)

A-4:ルーブリックがあることで「聞き手を意識してスライド作成」ができましたか。(図4)

A-5:ルーブリックがあることで、「聞き手を意識して発表内容を考えること」ができましたか。(図5)

図1 A-1 計画的な発表準備

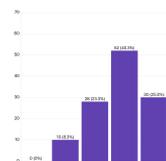


図2 A-2 正確さへの意識

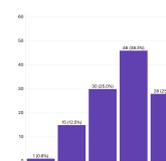


図3 A-3 聴衆意識(発表)

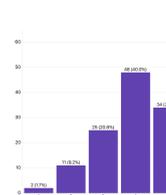


図4 A-4 聴衆意識(スライド)

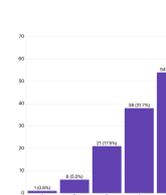
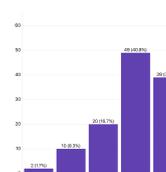


図5 A-5 聴衆意識(内容)



どの図を見ても、4と5の回答数が多い。数字で見ると、図1では80人(68.3%)、図2では74人(61.6%)、図3では82人(68.3%)、図4では92人(76.7%)、図5では88人(73.3%)の生徒が「だいたいできた」「よくできた」と捉えていることが分かる。加えてA-2、A-3、A-4、A-5の回答に関して自由記述で理由をたずね、質的データ分析を支援するソフトの1つであるMAXQDAで回答を分析した。

A-2(英語の正確性への意識)の回答に対して、8つのコード(ラベル)を自動作成した。①評価基準の明確化、②正確な英語表現の意識、③高評価への意識、④準備の計画性、⑤自己評価と改善、⑥ルーブリックの活用度、⑦英語力の限界、⑧時間的制約である。これらを分析すると、多くの生徒がS評価やA評価といった高評価を得るために、ルーブリックを見ながら正確な英語表現や文法、発音を意識して取り組んだと述べている。ルーブリックによって評価基準や目標が明確になり、計画的に発表準備を進められたという意見も多く見られた。

A-3(聞き手を意識した発表の可否)の回答に対しては、8つのコード(ラベル)を自動作成した。①自己認識、②原稿依存、③聞き手意識、④ジェスチャー活用、⑤評価基準理解、⑥発表準備、⑦言語表現、⑧発表への意欲である。これらを分析すると、発表において聞き手を意識した理由は多

岐にわたっていた。まず、多くの生徒が良い評価を得たいという動機が強く、ルーブリックの評価基準に「聞きやすさ」や「聞き手を意識した発表」が含まれていたため、それを目標に努力したという意見が多く見られた。特に、S評価やA評価の基準を理解することで、具体的な目標設定と達成への取り組みが可能になったという声もあった。また、聞き手に内容を分かりやすく伝えたいという意図も重要であったと考えられる。モデル動画を見てイメージを膨らませたり、自分の発表を聞き手の共感を得るものにしたと考えたりする中で、聞き手への問いかけやジェスチャー、アイコンタクト、分かりやすい表現、声の大きさ、話す速度などを意識し発表を心がけた生徒が多かった。一方で、聞き手を意識した発表が難しかったという意見もあった。原稿を覚えることや、緊張から聞き手の顔を見ることができなかつたり、原稿を読むことに集中し過ぎてしまつたりしたため、十分に聞き手を意識できなかったという反省の声もあった。しかしそうした中でも、少しでも聞き手を見ようと努力したり、問いかけを試みたりするなど、改善への意識は高く持たれていた。

A-4（聞き手を意識したスライド作成の可否）の回答に対しては、6つのコード（ラベル）を自動作成した。①聞き手への配慮、②自己評価と改善、③目標設定と計画性、④視覚的工夫、⑤理解促進、⑥ルーブリックの活用である。これら进行分析すると、多くの生徒が聞き手にとって見やすく、分かりやすいスライド作成を強く意識していた。具体的には、文字数を減らし、イラストや写真、アニメーションを多用する工夫が挙げられる。特に、英語での発表において、言葉の壁を補うために視覚的な要素を重視する傾向が見られた。また、自分の伝えたい内容が効果的に伝わるように、レイアウトやデザイン、色使いなどを工夫したという声も多く、聞き手の視点に立ってスライドを作成することの重要性が強調されている。

A-5（聞き手意識の発表の可否）の回答に対しては、6つのコード（ラベル）を自動作成した。①聞き手への配慮、②発表内容の構造化、③言語表現の適切性、④自己評価と改善、⑤発表の工夫、⑥主体性と意欲である。発表内容を考える上で、聞き手の理解や共感を意識したという意見が多く見られた。具体的には、聞き手に興味を持ってもらうための工夫、分かりやすい内容や表現、共感を得られるような内容の作成などが挙げられている。また、ルーブリックの存在が、聞き手を意識した発表内容の作成に役立ったという声も複数あった。

A部分の回答全体を見ると、ルーブリックを提示したことで、生徒の目標が明確化され、学習プロセスが可視化され、単元目標である「相手の共感を得るために」という目的を意識し、「思考力・判断力・表現力等」に変化が生じたと言える。一方で、ルーブリックをあまり活用しなかつた、または活用できなかったという声も一定数存在した。

また、図4のみがはっきりと階段状になっている。これは、生徒達がプレゼンテーション発表に取り組む際に、スラ

イド作成に重きを置いていることが分かる。授業者によると、Unit 6以前の単元のプレゼンテーション課題では、発表内容よりもスライド作成に力を注いでいた生徒が多かつたようだ。このことから他の図が図4と同様に階段状となるためには、生徒がルーブリックの活用に興味を見出し、常に意識するようになることが求められると考察する。

B部分：力がついたと感じたものへの問い

B-1:ルーブリック・プランシートがあることで、「自分から計画的に学習する力」は身につきましたか。(図6)

B-2:ルーブリックがあることで、「英語で自分の考え、思い、経験、感じたことを伝える力」は高まりましたか。(図7)

B-3:ルーブリックがあることで、「英語で原稿を書く力、自分の考えや思いを書く力」は高まりましたか。(図8)

B-4:ルーブリックがあることで、「単語、フレーズ、文法などの知識」が高まりましたか。(図9)

B-5:ルーブリックがあることで、「本文の内容を読んで理解する力」は高まりましたか。(図10)

B-6:ルーブリックがあることで、「話し手の言っていることを聞いて理解する力」は高まりましたか。(図11)

B-7:ルーブリックがあることで、「英語で発表する力」は高まりましたか。(図12)

B-8:ルーブリックがあることで、「聞き手のことを考える力」は高まりましたか。(図13)

B-9:ルーブリックがあることで「発音、イントネーション、強弱など」は英語らしくなりましたか。(図14)

B-10:ルーブリックがあることで、英語力全体として力がついたと感じますか。(図15)

図6 B-1 計画的な学習

図7 B-2 伝える力

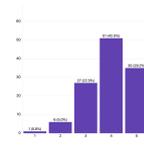
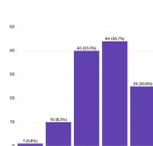


図8 B-3 書く力

図9 B-4 英語の知識

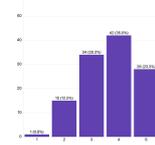
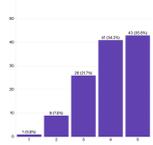


図10 B-5 読む力

図11 B-6 聞いて理解する力

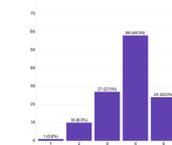
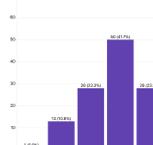


図12 B-7 発表する力

図13 B-8 聞き手考慮の力

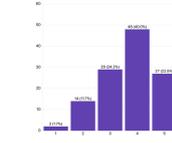
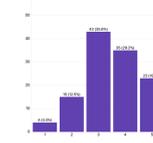


図14 B-9 英語らしさ

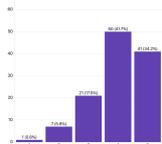
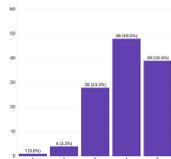


図15 B-10 英語力全体



Bパートの回答全体を見ると、ループリックを提示したことで、具体的にどのような力が身についたと生徒が実感しているかを捉えることができる。図7、9～11、13、14を見ると5段階のうち4で回答している生徒が多い。このことから英語で「伝える力」、「読んで理解する力」、「聞いて理解する力」、「話す(発表する)力」、「聞き手のことを考える力」、「知識」や「英語らしさ」がループリックによってSからCまでのレベルが段階的に示され、学習プロセスが可視化されることで、以前よりも力が高まったと捉えている生徒が多いと解釈できる。図15の「英語力全体」としても、4と回答している生徒が約5割、5と回答している生徒が約3割いるため、過半数の生徒がループリックによって、英語力が高まったと感じている。特に、英語で「書く力」については棒グラフが階段状になっていることから、「非常に高まった」と感じた生徒が最も多い。この結果は、図16の文部科学省が示す平成25年度及び令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査結果とは反する部分である。

「書くこと」の習得には課題があるとされている一方で、今回の結果を踏まえるとループリックの活用が生徒の「書く力」を高めることに有効であると考えられる。

図16 「書くこと」

	R5調査の問題番号	H25の通過率	R5の通過率
中2	B 6(1)~(3)	25.0%※	↑ 43.7%※
中3	A 10(1)	39.7%	↓ 36.9%
中3	A 10(2)	55.9%	↓ 35.5%
中3	A 10(3)	40.6%	↓ 24.1%

※中2の問題の通過率は平均値

Cパート：発表改善のために活用したものへの問い
ループリック活用度への具体的な問い

- C-1: マンダラートは自分の考えをまとめたり、広げたりするのに役立ちましたか。(図17)
- C-2: プランシートは計画的にプレゼンテーションの準備をすすめるのに役立ちましたか。(図18)
- C-3: ALTの発表はSレベルの発表、または発表のモデルとして参考になりましたか。(図19)
- C-4: 和合先生のA、B、Cのモデル動画はイメージを持つのに参考になりましたか。(図20)
- C-5: 自分の発表動画は、良くなった点と課題点を確認するのに役立ちましたか。(図21)
- C-6: 発表準備をすすめる上で教科書は役立ちましたか。(図22)
- C-7: 発表準備をすすめる上でWorld Classroomの添削機能は役立ちましたか。(図23)

図17 C-1 マンダラート

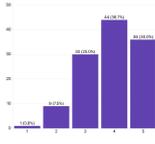


図18 C-2 プランシート

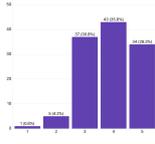


図19 C-3 ALT 発表

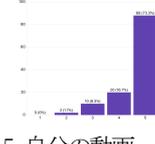


図20 C-4 JTE 動画

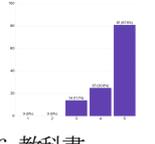


図21 C-5 自分の動画

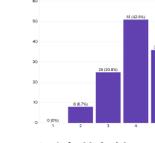


図22 C-6 教科書

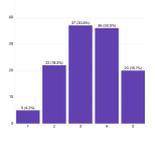
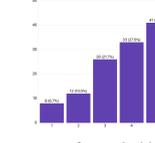


図23 C-7 添削機能



Cパートの結果全体を見ると、今回扱ったものはどれも、プレゼンテーション発表をより良いものとするために役立ったと捉えている生徒が多い。その中でも特に、ALTとJTEのモデル動画は約7割の生徒が「とても役立った」と回答しており、パフォーマンス課題を出す際に、生徒の力の変容を促すためには効果的なものと言える。

AからCパートのアンケート結果をグラフから考察することに加えて、生徒が5段階で回答しているものの回答傾向を捉えるため、因子分析を用いて、生徒の回答の背景にある要因を探った。まず、固有値1以上を基準として、最尤法で初期解を求めたところ、6回の反復で4因子が抽出された。続いて因子数を4に固定し、最尤法、プロマックス回転で分析を続行した結果、6回の回転で反復が収束し、4因子が抽出された。固有値の減衰状況と解釈可能性からこの4因子を採用した(表3)。表中にある各因子は事後アンケートの質問を、筆者が分析用データを作成するために省略したものである。項目の「ル」はループリック、「プ」はプランシート、「マ」はマンダラートを指す。

表3 事後アンケートの因子分析結果(最尤法、プロマックス回転)

因子I：発表のためのストラテジー				
ル聞き手発表	1.121	-0.247	-0.212	0.019
ル伝える力	0.823	-0.008	0.028	-0.022
ル聞き手考慮	0.812	-0.012	0.069	-0.04
ル発表	0.681	-0.038	0.196	0.056
ル聞き手内容	0.613	0.112	-0.082	0.125
ル書く力	0.562	0.346	-0.039	0.006
ル正確	0.405	0.207	0.206	-0.083
ル聞き手スラ	0.391	0.377	-0.127	0.01
ル聞く力	0.386	0.255	0.293	-0.034

因子Ⅱ：発表計画				
ブ準備	-0.145	1.153	-0.231	0.009
マ考えまとめ	-0.179	0.675	0.114	0.126
ル読む力	0.145	0.558	0.207	0.01
ルブ学習計画	0.393	0.545	-0.067	-0.044
ル計画	0.377	0.434	-0.108	0.06
因子Ⅲ：英語の知識・技能				
教科書	-0.135	-0.074	0.742	0.025
ル英語らしさ	0.263	-0.22	0.74	0.054
添削機能	-0.152	-0.092	0.644	0.087
ル英語力	-0.003	0.416	0.526	-0.064
ル知識	0.109	0.268	0.508	-0.099
因子Ⅳ：モデル提示				
ALT 発表	0.032	0.047	-0.004	0.978
JTE 動画	0.054	0.086	0.211	0.521
因子間相関				
	I	II	III	IV
I	—	0.738	0.749	0.26
II		—	0.719	0.244
III			—	0.148
IV				—

因子Ⅰは「聞き手を意識した発表」「英語で自分の考えや思いを伝える力」「聞き手のことを考える力」「英語で発表する力」「聞き手を意識した内容」「自分の考えや思いを書く力」「正確な英語で話をする意識」「聞き手を意識したスライド作成」「話し手の言っていることを聞いて理解する力」に強く反映されている。これらはすべて、プレゼンテーション発表を行う上で方策となる項目である。そこで「発表のためのストラテジー」と命名した。

因子Ⅱは「計画的なプレゼンテーション準備」「自分の考えをまとめたり、広げたりすること」「教科書を読む力」「自ら計画的に学習する力」「計画的な発表準備」に強く反映されているため、「発表計画」と命名した。

因子Ⅲは、「教科書」「発音などの英語らしさ」「World Classroom の添削機能」「英語力全体」「単語、文法などの知識」に強く反映されているため、「英語の知識・技能」と命名した。

因子Ⅳは「ALT モデル発表」「JTE モデル動画」に強く反映されているため、「モデル提示」と命名した。

因子分析の結果、因子Ⅰの「聞き手を意識した発表」の因子負荷量が1番高くなっていることから、ルーブリックを生徒に提示、共有したことで単元目標の中の「聞き手の共感を得るために」という目的を意識するようになったと言える。因子Ⅱでは、「計画的なプレゼンテーション準備」の因子負荷量が最も高くなっており、プランシートを提示したことで、発表本番までの学習計画を見通すことを意識するようになったと考えられる。因子Ⅲでは、因子負荷量がほぼ

同量であることから、因子Ⅰにある「正確な英語で話をする意識」と同程度関与が高いわけではないが、それに付随する単語、フレーズ、発音、イントネーションなどの英語の知識・技能面を意識していえると考えられる。因子間相関を見ると、因子Ⅰ～Ⅲは相互に関連し合っていることが分かる。因子Ⅳについては、ルーブリックの提示、共有とは直接の関連は強くないが、プレゼンテーション発表のようなパフォーマンス課題において、文言だけでなく視覚的なイメージが、生徒の学習への意識を高めるだろうと推察する。

続いて、C-8、9、10はルーブリックの活用について、直接質問した項目である。それぞれ、複数回答を認めている。C-8:プレゼンテーション課題で活用したルーブリックについて質問します。当てはまるものを選んでください(表4)。

表4 ルーブリックの活用方法への問い

ルーブリックがUnit 6の最初から示されたことで、「目標(学習計画)が立てやすかった…74人(62.2%)
ルーブリックを見て、「どの部分を意識する必要があるか」が分かりやすかった…74人(62.2%)
ルーブリックを見て、「自分の今のレベルと次に目指すレベル」がわかりやすかった…71人(59.7%)

C-8の回答を見ると、単元のはじめにルーブリックを提示することで、学習プロセスの可視化に役立ったと感じた生徒が約7割を超えた。自分の現在のレベル位置と次に目指すべきレベルとの差を理解し、その差を埋めるために何をすれば良いかを理解することができたと考察し、「学びに向かう力」に変化があったと考える。

C-9:今回、ルーブリックのSの評価をみなさんに考えてもらいました。そのことについて質問します。当てはまるものを選んでください(表5)。

表5 評価基準設定に対する意識変化への問い

Sのレベルがどのようなものか「イメージを具体的に持つ」ことができた…83人(69.7%)
3つの評価項目のうち「1つでも多くSを取れるように意識する」ようになった…52人(43.7%)
先生からの評価だけでなく、自分たちで評価を決めたことで「Sを目指そうと思えた」…50人(42.0%)

C-9の回答を見ると、学習者主体の評価基準設定が目標をイメージすることにつながり、学習意欲を高めることに役立ったと感じた生徒が約半数を超え、「学びに向かう力」に変化があったと考える。

C-10:中間発表等でのクラスメートとの相互評価は、発表を改善するのに役立ったかどうかについて質問します。当てはまるものを選んでください(表6)。

表6 中間発表でのルーブリックの役割への問い

ルーブリックがあることで、「良い点と改善点」が分かりやすかった…82人(68.9%)
ルーブリックがあることで、相互に評価するときに「どの点を見れば良いか」分かりやすかった…73人(61.3%)
ルーブリックがあることで、「1つでも上のレベルを目指せ

るように意識する」ようになった…63人 (52.9%)

C-10 の回答を見ると、ルーブリックがあることで中間発表が単なる発表会に留まらず、発表本番に向けたプレゼンテーションの改善につながったと感じた生徒が約7割を超えた。このことから、「思考力・判断力・表現力等」に変化があったと伺える。一方で、C-8～C-10 の回答でルーブリックを活用しなかった生徒も一定数いることから、ルーブリックを活用するその方法自体を生徒と共有する必要があると推察する。

さらに詳しく検証結果を得るため、質的調査を目的として S, A, B, C レベルの生徒それぞれ4人を抽出し、計16人にインタビュー調査を実施した。10分程度で、4人ずつ行った。質問事項は全部で7つである。

- ①前回のプレゼンテーション発表と今回との比較
- ②今回のプレゼンテーション発表で、力がついたもの
- ③ルーブリックの活用に対する意見とその理由
- ④単元初期からのルーブリック提示による学習変化の有無とその具体例
- ⑤学習者主体の評価基準設定に対する意見とその理由
- ⑥中間発表に対する意見とその理由
- ⑦プランシートの活用に対する意見とその理由

インタビュー記録を、MAXQDA を使い文字起こし、自動コーディング、分析を行った。インタビューの記録を1部抜粋で示す。

生徒A『どうしても先生から提示されるってのは、受け身になりやすかったりすると思うんですね。そこで生徒たちも考えるってなると、こう良くするためにはどうすればいいかっていうのを、自分で本気で考えることができると思います。そうすると、自分の中の意志が芽生えるんじゃないかなって。S に対する意識が芽生えて、より良い発表ができるんじゃないかなって思いました。先生に提示されると、自分の中での無理だなんていうラインを超えてきたものが先生から提示される。でも自分達で決めると、自分の中では頑張ればここまでできるっていうところをみんなと設定できたいと思います。』

教師からの受け身の評価基準ではなく、生徒自身が評価基準を考えることで、発表を良くする意志が芽生え、より良い発表につながると述べている。また、自分達で目標を設定することで、頑張ればできるという意識が生まれ、達成可能な目標設定にルーブリックが活用され、それに向かって努力する主体的な姿勢が示されている。

生徒B『明確な指標、評価に値するそのゴールがあるので、スライド作りとか原稿を作る中ですごいわかりやすく明確になったので、やりやすかったです。特に自分の経験を入れるとより評価が高かったんですけど、僕それがなかったら多分自分の経験を入れてなくて、ただ調べたことをまとめるだけだったと思うのですごく良かったです。』

ルーブリックが明確な指標とゴールを提供し、スライド

作成や原稿作成を分かりやすくし、自身の経験を盛り込むことで評価が高まったと述べており、ルーブリック活用による発表の改善について言及している。

生徒C『自分だけじゃわからないことあるじゃないですか。

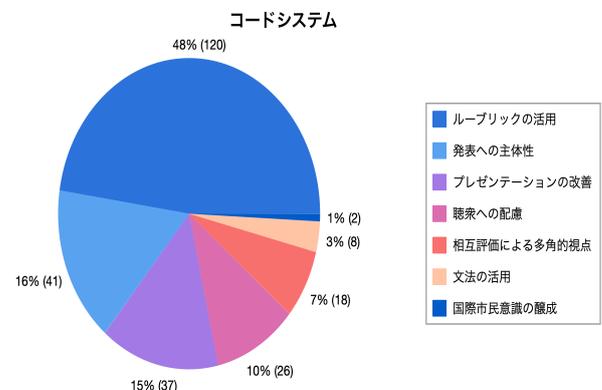
例えば、これは自分だったら相手に伝わるとか思っていたことも、もしかしたら相手からは分かりづらかったのかもしれないし、結局プレゼンテーションって相手に伝える目的じゃないですか。相手に伝わらないと意味がないんですよね。なので、中間発表が、すごく自分のスライドとか発表を改善するのに効果的だなんて思いました。』

生徒D『中間発表で撮ってもらった動画で、他人の目線になって自分を見ることで、ルーブリックがあるので分かりやすく、自分が今どの段階だなんていうのがすごく分かりやすく、役立ちました。』

自己評価だけでは気づけない点を他者からのルーブリックを用いたフィードバックが補い、発表の改善に効果的であったと述べている。客観的な視点を取り入れて積極的に自己改善を図る姿勢が示されている。

インタビュー結果をコーディングしたところ、7つのコード(ラベル)を自動作成した。①ルーブリックの活用、②発表への主体性、③プレゼンテーションの改善、④聴衆への配慮、⑤相互評価による多角的視点、⑥文法の活用、⑦国際市民意識の醸成である。それぞれのコードの統計量を以下にグラフで示す(図17)。

図17 コードの統計量



インタビュー結果を分析すると、「ルーブリックの活用」について最も多く語っている。次いで「発表への主体性」、「プレゼンテーションの改善」、「聴衆への意識」、「相互評価による多角的視点」、「文法の活用」、「国際市民意識の醸成」の順である。ルーブリックがあることで、生徒は目指すべき目標が明確になり、発表に向けてどのような準備をするべきか、という学習プロセスが可視化されたと捉えている。特に、中間発表でルーブリックを使った相互評価に効果を感じている。自分の視点だけでは見えてこなかった他者の視点を参考に、プレゼンテーション発表に向けて、「聞き手を意識して」スライド、発表内容を改善という点は、コミュニケーションにおける見方・考え方に影響し、「思考力・判断力・表現力等」に変化があったと考えられる。さ

らに、ルーブリック評価基準の一部を生徒と共同で考えたことにより、以前は難しいと感じていた評価レベルにも意欲的に挑戦しようとする姿がうかがえる。これは、「学びに向かう力」に変化があったと考察する。

5. 成果と課題

本研究は、外国語科におけるパフォーマンス活動にルーブリックを活用し、単元初期からの提示と反復的な活用(問1)、ならびに評価基準の一部を生徒と協同で作成する実践(問2)が、生徒の学習や意識にどのような変化をもたらすかを検証したものである。

まず、問1に関しては、ルーブリックを単元初期から提示し、学習過程を通して活用したことで、生徒が評価基準や学習目標を意識しながら計画的に学習に取り組む姿が多く見られた。量的データおよび因子分析の結果からは、「聞き手を意識した発表」や「伝える内容の構成」、「学習計画」といった側面が強く関連しており、ルーブリックの提示が、生徒の思考・判断・表現の過程を支える方策として機能していたことが示唆された。また、自由記述やインタビューにおいても、中間発表や相互評価を通して、視線、ジェスチャー、問いかけ、話す速度や声量といった点を意識しながら発表を改善しようとする記述が多く見られた。これらのことから、ルーブリックの活用は、生徒の「コミュニケーションにおける資質・能力」、特に「思考力・判断力・表現力等」に肯定的な影響を与えたと解釈できる。

一方で、問1に関する課題として、ルーブリックを十分に活用できなかった生徒の存在が挙げられる。ルーブリックの記述が抽象的で理解しづらかったり、活用方法が十分に共有されていなかったりした可能性が考えられる。また、本研究では生徒同士の相互評価は実施したものの、教師からの形成的フィードバックを十分に行うことができなかった点も課題である。今後は、ルーブリックの記述をより分かりやすい表現に工夫するとともに、教師による中間的なフィードバックを組み合わせた指導の在り方を検討する必要がある。

次に、問2に関しては、評価基準の一部を生徒と協同で作成したことにより、生徒が評価を自分事として捉え、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。アンケート結果からは、Sレベルの基準を具体的にイメージできるようになった、生徒自身が評価基準づくりに関与したことでより高いレベルを目指そうとした、といった意識の変化が確認された。インタビューにおいても、「与えられる評価」ではなく「自ら関与する評価」と捉え直されたことが、主体的な学習態度や挑戦しようとする姿勢につながったことが語られており、評価基準の協同作成が生徒の「学びに向かう力・人間性等」に肯定的な影響を与えたことが示唆された。

その一方で、問2に関する課題としては、評価基準の協同作成をどの範囲まで生徒に委ねるのかという点が挙げられる。本研究ではSレベルに限定して協同作成を行ったが、今後は他のレベルや観点についても生徒の意見を取り入れ

る方法を検討する必要がある。また、意見集約や合意形成の過程において、一部の意見に偏る可能性もあるため、意見収集や合意形成の方法についても工夫が求められる。

以上より、ルーブリックを単元初期から提示し、学習過程の中で活用するとともに、評価基準の一部を生徒と協同で作成することは、生徒の思考・判断・表現力を育成するだけでなく、主体的に学習に向かう態度の形成にも寄与することが示された。今後は、ルーブリックの示し方や活用方法、教師による形成的フィードバックの在り方を改善しながら、指導と評価の一体化をより実質的なものとしていく必要がある。

さらに、ルーブリックを活用した「指導と評価の一体化」は、個々の教科にとどまるものではなく、学校全体で共有されることが望ましい。生徒が主体的に学びを深めていくための足場として、ルーブリックの可能性を、英語科に限らず他教科にも広げていくことが、今後の課題である。本研究の成果を校内外に発信し、実践の共有を通して、教育現場における指導と評価の在り方をさらに検討していきたい。

謝辞

本研究の遂行にあたり、検証授業を共に計画、実施して下さった三芳町立三芳中学校藤原瑞樹先生に深謝致します。

参考文献

- 菅正隆(2020)。「中学校外国語 従来型の指導法からの脱却」田中耕治(編集代表)『各教科等の学びと新しい学習評価』ぎょうせい。
- 国立教育政策研究所(2020)。「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料中学校 外国語」。
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(著)(2019)。「英語教育用語辞典 第3版」大修館書店。
- 鈴木雅之(2011)。「ルーブリックの提示が学習者に及ぼす影響のメカニズムと具体的事例の効果の検討」『日本教育工学会論文誌』35(3)。
- スティーブンス・ダネル・レビ・アントニア・佐藤浩章監訳・井上敏憲・俣野秀典訳(2014)。「『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部」。
- 田中博之(2019)。「『アクティブ・ラーニングの学習評価』学陽書房」。
- 中央教育審議会(2019)。「『児童生徒の学習評価の在り方』」。
- ハッティ・ジョン(著)・山森光陽(監訳)(2019)。「『教育の効果メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』図書文化社」。
- 藤居真路(2020)。「EFLライティングにおける、授業目標とルーブリック評、学習者の認知の関係」『中国地区英語教育学会誌』50。
- 松崎邦守(2016)。「外国語(英語)のルーブリックに関する実践的研究」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』67(1)。
- 文部科学省(2021)。「『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』開隆堂」。
- 文部科学省(2025)。「『平成25年度及び令和5年度中学校学習指導要領実施状況調査』」。